まくらの露

五十九

下

へ 5
6499

長陽雲林叢文庫

杉夫藏書

へ5
6499

010186021989

近江路中河内の清水まて
釣り舟つくあるも氷に凍る哉　西石
霙ふる　勝代の寒さる常　鳥津
真弓の葉に小雀たうけ持て
葉せりしとふさの清き足
烟りの霜研ぎ又物をたあす月
寒さなきやらぬさい　林風

蛙鳴の分入出さる書院床
背きて蘭のさしき挿第
親類のつある縁気もこの清き
姫の鞍替くしけりのあきらく
花まりと出る登し推移れ
夜空月板をおりし雪閣
東嶋れ油淫しく求めしく
まさふ自由にあつね石山

乃のしと付く一膝にある傑
畾郎もしる達牧渓の那
魔前の肩杖されて極陳く
雲の中に波の中ゆる
吉史入に来ても振難を嘆きけり
まうた世を隠にせまある
子無りれは備への毛罵ちるへ
號帋おして書ける賛ゑ詠

沐　兵

憾まやりの足ねとりて　砥なまま
久を志とりて緑毛の毛ゆ
惟子八郎も娘にて家画し
鐃手桶を担駈り流む
石原（シツクビ）りに扇のとまる　松代粋
古志雲にも雲大れ晩つく
千を振りともし捐れもし
二家まく茹さ葛の暖とう

鶴の聲の清水ハ小雀もとゝ添り
蜩り見え申しの賣る雛舟
おと指着た先生来ある記と日和
うまく成る鰡の筒切
ふ縮字起れ清水されて粧きて
霽のわれの霽き川草

葉内芽を指まくあく溜薬の氏　島津
顔みつまゝく起りよきり日　桂摩
月ちの寺丁場ころ小家然く
洗ふ八笑の強る間引菜
咲きこまゑりひゝく林とかり
残る舟結れ無定なあ追へ

銀燭に宮下れあかすゝ銀世界
見えはりまて勝手ひ戸席（アニヘラ）
よきみ芸を浮かおこそうく番人驚
町に横顔の遠眼鏡
店になる酒ことに誰をうるひく
雪掃しの古める箒かよわき
満月も明て気の清く珍き哉
花さ折紙れあまりなかりけり

畑（ハタ）耕すてに光りつれて梅角蔔
鳥の声を浴る吉き哉
梅花と菜の花をも年によく
清しきひとる古史れ庭
浦波の音もへ妻を恋のまゝて　李
雲助と手この潔白な腹　洸
縮衣安（メリヤス）をはつして袖にまくこみ
混ぬ臺ハ湯くよりも清れ

涼ひとけて　雨ふり　つゞ萩咲り

昼なるまゝに常門志める里

余されて　電燭付斗れ燃せあり

船よりおろしと　封鍾き頌り

梯もえゆる二階のあけあわし

月ましく家も根まもくぬ秋

まつ屋のちらく　遠る　鶴　雲

二十九日（ヒツマリ）村の柳も　棟よ出る

平押よ今度の座たちのよく

解てまし重年　甘藷（イモ）の蛙鳴

坪もはく　探烟管を　腰よさし

読り　社の　鉛筆　高　編

雲もんなまて八幡ぬ　やまのを

弥生なり　去り七日のぬ力

蕣の閑も遅まさ　山家の雑　　島津　李曠

流まさり　流むる空の月

砂糖挽牛の轆轤に　秋なきて

意な酒りの宿わりも寒寸

ぬるいとて　油所のなきぬ雲肉喜

軒の掛菜に　黄なるの叢

金鳴し　松も四五年のぬけてく

ま婦まもを　虜り帰る

世渡りも仕あく　天ゆる暖房の町

なまめくつれく　茶屋を結る

胡葱の噯気（オクヒ）も恥ぬ　愁をもして

さぬきゝぬ　眼に紛ゐる気

出る月に　爪紅をあらま明し

塗も来り切　春の扇子

七

鷺田の百年 狐に捨り 潤
蹇車 械にましらの夫
雷落て来ハ家よりし此蟬しくれ
芝れ雪宮の黒き石壇
走りまふり黒き白ふ赤の飯
又わすれ夜ら輝似ち出ぬ念主
涼あれ小出ても後下る気のけりて
蝶て手より小つまむ山蠶(ケシケシ)虫

暁
沐

蟹のなひ蒔子ハやのとし眠たかり
花持ち人と女生のおしきよ
のつくと看れ隣ゝに蔦ゆまひく
矢そへ白ぬ風れ小く
花鳩の裏の山菜も咲ま今り
やまぬ夜般をとめる折 離
花鳴の去りとある 霧 浮御
そはや寂る比静くのす也

八

湖上魞(エリ)漁にせしある　冬峰
眼にはかなき子ともあまたある面
風をあらしたらんて肩に古着賞
波の年にもいつ川を楽しみ
競ひたり鳥の標の目かくしまた
ふかり漂ひてゆるむ艇の声

研ぎ澄ます鎌にみ寄るしられ鉛　島津
岸の湖に芦のまるらん　柿谷
芝生寒つゆふかく楚緒すゑ
生干の魚の米を篝へ寄
結ぶ屋の鉢にもちて月のかげし
湖ぞなくなる漕ぎ戸の声

棠くし　打る扇さへ　とくに並
冷飯蒸せんとひかれ香のする
池の雪の庭の跡わか栖家小大名
数寄者草庵の鼻結ゆかめる
卯の花に眠りし塔に蔵しまて
おろす幟の竿にさまへ　月
うつる代に今は渚も呂に　雅
みとろふよして神事の荻のうき

わかれ路に翻ゆさして　ちし　耿文
手られて外さ脚達とらろし
姫焚ハ気もとどく当の雲
深山鉦のうめる　人聲し
年玉は一はいつかる　勝菜首
雲はかり此灰淋酒に酔ふ
小右田にわれさ揆をとりてやり
袖とめてよき　姝が麓　明

谷　津

空蟬にきこやけぬと帽のつゆき
法鉢車子きに六塵の鐘
鐃鈸のせいつうし浮きあかりて
其芋 はしきうゆくかの叢ちて
穴熊にかきんわかぬ寛のやうき
いかよ是て いかまきし 賣
月に讀明錄の角力托 絵 合
千本あくうしよ五の松風

松風に嗚子の和を入れそめて
狐狗狸編きまさしおとろへ
味噌桶ににあけるけきし書てはり
訛家を及ぶ坊官托寓
狼音家さ人の出力に篤を伸進
雲もひらりに心とも年あふ

中山主僕東都にて幸ともに
東絵人もしつくり楽にゐると
人こころつきてまちかねし
なりけれも

御嶽を先不二と見むかふ旅人　島津
雁の歸りの声待ちぬ橋　眉峰
湖の月数ある海に古歌ひく　仝
世話よいふる岸も春の夜に　津
巣籠の鶴のわかれやら中の瀬に　仝
思ひ出すかなあちらねより先　峰
やさしぬ姻家に移て酒を酌　仝
深川くめぐる埜の稲荷庵　津

梅の香を　うま　き花のちらしく　峰

郷の庵根の見ゆる岩窟　津

さらしと此の錦る一面あかり　峰

南とれ断れの手もとさる　津

持あての葉にも紫のとり合て　峰

情実法会に不案気未市　津

鹹鹺商人の枷の硝子(フラスコ)罎のとりさく　峰

色も眉毛の似合しき　顔　津

あわれさを去る人ゆくる月の影　峰

小鳩の音も拝根なさまの春　津

稲畑まうしの子に嫁も聞手箏　全

心にのみ連八座まて夜の中　峰

お經に小径の成る古漬せ口　津

塗籠ふらまた長持のうち　峰

三ツ子とある音猿に巨嘘ありてこれ　津

いとみし粉に葉あかるまゝの　峰

あをやぎの杜撰にわすれ飯絶也　津

はなし浪のよするる石垣　峰

鶺鴒のひらりふらりと飛すぎり　津

捨まゐらせて布子着る秋　峰

菅ぬ月形りもせりもはや満て　津

棟床とあまりて擁隠ゆるある　喰

出刃ときし縮緬迷ふ移家　仝

取りさくまれぬ小柄ありしまま　津

春水と名のつく川も春あさく　仝

ちりしく花の梢に絡る藻　峰

雛の菓子当ぬまうよまて立あまり　仝

風とこうよ寄て星嘉の宴　津

嘉永歳次辛亥仲春書於程星樓

龍鱗閣主之机下録

鳴海

柿岩

眉峰

富田藏書